別れの言葉

にーとん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

別れの言葉

【Nコード】

N9770F

【作者名】

にーとん

【あらすじ】

『さようなら。』そんな声が、聞こえた気がした。この先には何が待っているのだろうか。

『さようなら。』

そんな声が、聞こえた気がした。

この先には何が待っているのだろうか。

限りない道。

どこまでも続く道。

その先で彼女は、誰と出会い誰と笑っていくのだろうか。

陽は雲に隠れ、少し薄暗くなった。

残っていた排気ガスが、本当に彼女が行ってしまったことを俺に悟らせた。

結局、叶わなかったのだ。この恋は。

「いや。」

まだ間に合うかもしれない。

ここは大きい道ではないし車が通ることも少ないから信号はほとんどの確率で赤になっているはずだ。車も本来の速さを発揮できないかもしれない。

そんな言葉が頭の中をよぎる前から、俺は走り出していた。

前にはまだ車が見える。

追いつく。そう確信した。

俺は陸上部で鍛えていたから足には自信がある。

せめて、彼女にこの気持ちを伝えないといけない気がした。

俺は、走った。

陸上部の大会のときよりも、ずっと速く走った。

息ができない。

でも、そんなことも今はどうでも良いことだった。

この機会を逃せば一生彼女と会うことは無いだろう。

車の、１００メートルほど前に信号が見えた。

それが示している色は赤だった。

どんどん、車に近づいていく。

車が、近づいてくる。

そして、窓から彼女の顔が見えた。

俺は言葉を伝えようとして、口を開けた。

しかし、俺の口から言葉は出なかった。

まるで言葉を話すことを忘れてしまったかのように。

何も、言うことができなかった。

彼女が、すこし微笑んだ。

『さようなら。』

そんな声が、聞こえた。

今度ははっきりと。

なぜ俺は恋をしてしまったんだろうか。

こんなにも悲しい想いをするのに、なぜ俺は恋をしてしまったのだろう。

しかし今はそんなことすらどうでも良かった。

雲が動き、陽が出た。

「さようなら。」

そして俺は帰路についた。

隣を下校中の男子と女子が仲良く通っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

　PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9770f/

別れの言葉

2010年12月30日15時13分発行